

[A年] 聖霊降臨節第21主日(2021年10月17日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 33章17～22節**

- 17 あなたの目は麗しく装った王を仰ぎ
遠く隔たった地を見る。
- 18 あなたの心はかつての恐怖を思っ
て言う。
あのとき、数を調べた者はどこに
いるのか
量った者はどこにいるのか
やぐらを数えた者はどこにいるの
か、と。
- 19 あの傲慢な民をあなたはもはや見
ない。
その民の唇は重くて聞き分けるこ
とができず
舌はどもるので理解しえなかつた。
- 20 シオンを仰ぎ見よ、我らの祝祭の都
を。
あなたの目はエルサレムを見る。
それは安らかな住まい
移されることのない天幕。
その杭は永遠に抜かれることなく
一本の綱も断たれることはない。
- 21 まことに、そこにこそ
主の威光は我らのために現れる。
そこには多くの川、幅広い流れが
ある。
櫓をこぐ舟はそこを通らず
威容を誇る船もそこを過ぎること
はない。
- 22 まことに、主は我らを正しく裁か
れる方。
主は我らに法を与えられる方。
主は我らの王となって、我らを救
われる。

【使徒書日課】 ヨハネの黙示録 7章9～17節

- 9この後、わたしが見ていると、見よ、
あらゆる国民、種族、民族、言葉の
違う民の中から集まった、だれに
も数えきれないほどの大群衆が、
白い衣を身に着け、手になつめや
しの枝を持ち、玉座の前と小羊の
前に立って、¹⁰大声でこう叫んだ。
「救いは、玉座に座っておられる
わたしたちの神と、小羊とのもの
である。」
11また、天使たちは皆、玉座、長老
たち、そして四つの生き物を囲んで
立っていたが、玉座の前にひれ伏し、
神を礼拝して、¹²こう言った。
「アーメン。賛美、栄光、知恵、感
謝、
誉れ、力、威力が、
世々限りなく
わたしたちの神にありますように、
アーメン。」
13すると、長老の一人がわたしに問
いかけた。
「この白い衣を着た者たちは、だれ
か。また、

- どこから来たのか。」¹⁴そこで、わた
しが、「わたしの主よ、それはあなた
の方がご存じです」と答えると、
長老はまた、わたしに言った。「彼
らは大きな苦難を通して来た者
で、その衣を小羊の血で洗って白
くしたのである。」
15 それゆえ、彼らは神の玉座の前
にいて、
昼も夜もその神殿で神に仕える。
玉座に座っておられる方が、
この者たちの上に幕屋を張る。
16 彼らは、もはや飢えることも
渴くこともなく、
太陽も、どのような暑さも、
彼らを襲うことはない。
17 玉座の中央におられる小羊が
彼らの牧者となり、
命の水の泉へ導き、
神が彼らの目から涙をことごとく
ぬぐわれるからである。」

【福音書日課】 マタイによる福音書 25章1～13節

- 1「そこで、天の国は次のようにたと
えられる。
十人のおとめがそれぞれともし火
を持って、花婿を迎えに出て行く。
²そのうちの五人は愚かで、
五人は賢かった。³愚かなおとめ
たちは、ともし火は持っていたが、
油の用意をしていなかった。
⁴賢いおとめたちは、それぞれの
ともし火と一緒に、壺に油を入れて
持っていた。⁵ところが、花婿の
来るのが遅れたので、皆眠気がさ
して眠り込んでしまった。⁶真夜中
に『花婿だ。迎えに出なさい』と
叫ぶ声がした。⁷そこで、おとめ
たちは皆起きて、それぞれのともし
火を整えた。⁸愚かなおとめたちは、
賢いおとめたちに言った。
『油を分けてください。わたした
ちのともし火は消えそうです。』
⁹賢いおとめたちは答えた。
『分けてあげるほどはありません。
それより、店に行って、自分の分
を買って来なさい。』¹⁰愚かな
おとめたちが買いに行っている間
に、花婿が到着して、用意のでき
ている五人は、花婿と一緒に婚宴
の席に入り、戸が閉められた。
¹¹その後で、ほかのおとめたちも
来て、『御主人様、御主人様、開
けてください』と言った。¹²しか
し主人は、『はつきり言っておく。
わたしはお前たちを知らない』と
答えた。¹³だから、目を覚まし
ていなさい。あなたがたは、その
日、その時を知らないのだから。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 33章17～22節

17 あなたの目は美しく装った王を見つめ
遠くまで広がった地を見る。

18 あなたの心はかつての恐怖を思い起こす。

「数を数えていた者はどこにいるのか
重さを量っていた者はどこにいるのか
やぐらを数えていた者はどこにいるのか。」

19 あなたはもはや、

厚かましい民を見ることはない。
言葉は聞き取りにくく
舌がもつれて理解できない民を。

20 シオンを見つめよ、

私たちの祭りの町を。
あなたの目はエルサレムを見る。
安らかな住まい
移されることのない天幕を。
その杭は永遠に抜かれることなく
その綱は一本も断たれることはない。

21 そこには

主の威厳が私たちのためにある。
そこには川があり、その流れは幅広く
櫓で漕ぐ舟はそこを通らず
強大な船もそこを通過しない。

22 主こそ私たちを裁く方。

主は私たちを指揮される方。
主は私たちの王。
この方が私たちを救われる。

ヨハネの黙示録 7章9～17節

9この後、私は数えきれぬほどの大群衆を見た。
彼らはあらゆる国民、部族、民族、言葉の違う
民から成り、白い衣を身にまとい、なつめやし
の枝を手に持って、玉座と小羊の前に立っていた。
10彼らは声高らかに言った。

「救いは、玉座におられる私たちの神と
小羊にある。」

11また、天使たちは皆、玉座と長老たちと四つ
の生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひ
れ伏し、神を礼拝して、12こう言った。

「アーメン。賛美、栄光、知恵
感謝、誉れ、力、権威が
世々限りなく私たちの神にありますように
アーメン。」

13すると、長老の一人が私に問いかけた。「こ
の白い衣を身にまとった者たちは誰か。またど
こから来たのか。」14そこで私が、「私の主よ、
それはあなたがご存じです」と答えると、長老
は言った。「この人たちは大きな苦難をくぐり
抜け、その衣を小羊の血で洗って白くしたので
ある。」

15 それゆえ、彼らは神の玉座の前にいて

昼も夜も神殿で神に仕える。
玉座におられる方が、彼らの上に幕屋を張る。

16 彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、

太陽も、どのような暑さも
彼らを打つことはない。

17 玉座の中央におられる小羊が

彼らの牧者となり
命の水の泉へ導き、
神が彼らの目から涙をことごとく
拭ってくださるからである。」

マタイによる福音書 25章1～13節

1「そこで、天の国は、十人のおとめがそれぞ
れ灯を持って、花婿を迎えに出て行くのに似て
いる。2そのうちの五人は愚かで、五人は賢かっ
た。3愚かなおとめたちは、灯は持っていたが、
油の用意をしていなかった。4賢いおとめたちは、
それぞれの灯と一緒に、壺に油を入れて持って
いた。5ところが、花婿の来るのが遅れたので、
皆うとうとして眠ってしまった。6真夜中に『そ
ら、花婿だ。迎えに出よ』と叫ぶ声がした。7そ
こで、おとめたちは皆起きて、それぞれの灯を
整えた。8愚かなおとめたちは、賢いおとめたち
に言った。『油を分けてください。私たちの灯
は消えそうです。』9賢いおとめたちは答えた。
『分けてあげるにはとても足りません。それよ
り、店に行って、自分の分を買って来なさい。』
10愚かなおとめたちが買いに行っている間に、
花婿が着いた。用意のできている五人は、花婿
と一緒に祝宴の間に入り、戸が閉められた。11そ
の後で、ほかのおとめたちも来て、『ご主人様、
ご主人様、開けてください』と言った。12しかし
主人は、『よく言うておく。私はお前たちを知ら
ない』と答えた。13だから、目を覚ましていな
さい。あなたがたはその日、その時を知らない
のだから。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・10月17日「聖霊降臨節第22主日」の日課主題は「天国に市民権をもつ者」。旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、いわゆる「第一イザヤ」の預言集としてまとめられている最後の部分(32~35章)、終末的な回復預言が告げられる中でも「神の王的支配」が示される箇所。使徒書日課は、「ヨハネの黙示録」から、著者ヨハネが見た天上の幻の一つで、天上の玉座を中心とした礼拝の営みに白い衣を着た群衆が加わる様子を描く箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、いわゆる「十人のおとめのたとえ」の箇所。

・当日の石神井教会は、「在天会員記念礼拝」として主日礼拝を整える。この日の主日聖書日課は、「終末」を主題にしており、そのまま用いる。

旧約日課(イザヤ 33章より)

・「イザヤ書」は、ヘブライ語正典中「後の預言者」の第一に置かれた預言書で、正典編纂時に「預言者」全体を一つに結びつける要とし置かれたものと推察される。通常、39章までを「第一イザヤ」、40章以下を「第二イザヤ」と呼び区別する。「第一イザヤ」は、歴史上の「預言者イザヤ」の人物と時代を明確に背景として物語られ、また預言が告げられているのに対して、「第二イザヤ」は、明らかに歴史上の「預言者イザヤ」とは異なる時代を背景とした預言が告げられている。おそらく、「第一イザヤ」は、前8世紀末の南王国で宮廷預言者として歴代の王に仕えた祭司イザヤの公式記録として作成された「預言者イザヤの預言の書」の類が元になっているのに対して、「第二イザヤ」は、「預言者イザヤ」の思想を継承する祭司=預言者集団が前6世紀の南王国滅亡・バビロン捕囚の時代に至って、「預言者イザヤ」の預言活動を継承する意図でおこなった預言を収集した預言集であろうと考えられる。その当初の目的は、バビロン捕囚からの解放後に為されたユダヤ教共同体の再建における思想的中核を担うことにあったのだと推察されるが、結果として、それが正典「預言者」の時代を超えた普遍性を生み出すことになったのだろう。

・日課箇所は、「第一イザヤ」中、預言集としては最後のまとめ(32~35章)の一部で、終末的視座に立って、イスラエルの回復のときには神ご自身が「王」として支配されるだろうことを預言として告げている。歴史上の「預言者イザヤ」の時代は、北王国が滅亡し(前722年ごろ)、南王国もアッシリアの圧迫によって滅亡の危機にあった。「第一イザヤ」の終わりに置かれているイザヤとヒゼキヤ王の物語(36~39章)で、ヒゼキヤ王はイザヤの預言を聞き入れることで危機を脱し、王国を存続させている。そこでヒゼキヤ王は、神の王的支配を信じ、受け入れた謙虚さのゆえに、王国滅亡を逃れさせる神の御業を見る者とされた、と理解されているのである。

使徒書日課(黙示録 7章より)

・「ヨハネの黙示録」は、迫害により島流し幽閉状態にあった「僕ヨハネ」が主日の礼拝の中で示された幻を記し、自分の関係する「アジアの七つの教会」に宛てて送った書簡という形式で整えられた本体を、さらに「黙示(=啓示)」文書としての体裁に仕上げた文書。「僕ヨハネ」は、「ヨハネ福音書」や「ヨハネの手紙」で想定される「ヨハネ教会共同体」の指導者とは異なる人物と考えられている。「ヨハネ福音書」や「ヨハネの手紙」とは、神学思想も大きく異なり、むしろ、「アジアの七つの教会」という教会群を介して「パウロ書簡」との共通性が見られる。

・日課箇所は、4章から記されている「天上の礼拝」の幻の一部。4章から、「イザヤ書」6章や「エゼキエル書」などでも描かれる「ケルビム(=セラフィム)」に類した天使？が神の玉座の前で繰り広げる讃美の礼拝に「長老たち」が列し、さらにそこに「小羊」が加えられる様子が描かれていたが、日課箇所の7章に至って、その天上の礼拝に「回復されたイスラエル」としておびたしい群衆が加わる様子が描かれている。この群衆は、従来の「ユダヤ人」の枠組みに規定された「イスラエル」ではなく、その枠組みを超えて最大限すべての人びとに拡大された「イスラエル」として描かれるが、この新しい「イスラエル」が、「その衣を小羊の血で洗って」いただくことによって回復された「イスラエル」であることが、天上の「長老」によって告げられている。

・「白い衣」は、「福音書」全体で特徴的な存在を示すものである。すなわち、それは、神の使いとして主イエスにおいて起こる御業を告げる者の姿であり(復活顕現物語、降誕物語を参照)、また、主イエスご自身の姿でもある(高い山での変容の逸話を参照)。「パウロ書簡」では、このイエスと結びつく洗礼を受ける者のことが、「キリストを着ている」(ガラ 3:27)などと表現されており、古代教会は早くから、洗礼に際して「新しい真白の衣」を着せるという習慣を定着させている。

福音書日課(マタイ 25章より)

・日課箇所は、「マタイ福音書」によって拡大された主イエスの「終末に関する教え」の一部で、「ルカ福音書」に並行する、また「マタイ福音書」独自の、たとえが並べられている中の一つ。文脈上、これらは、いわゆる「主イエスの小黙示録」と呼ばれる終末の教えの延長上に置かれているが、「マタイ福音書」は、これらのたとえを「天の国のたとえ」として提示しており、いわゆる「終末思想」を緩和し、「教会論」の教えへと修正している。

・日課箇所の「十人のおとめのたとえ」は、「その日、その時は、だれも知らない」(24:36)ので、その時に備えられるように「目を覚ましていなさい」(24:42)という、終末論的勧告を踏まえて取り上げられている。ところが、このたとえでは、「目を覚ましていなさい」という勧告におとめの誰も従えていない状態にある。もちろ

ん、前段(24:45~51)に置かれた「忠実な僕と悪い僕のたとえ」で、主人の帰りを待つ僕が、いつ主人が帰って来ても良いように備えて待つべきであって、まだ帰ってこないだろうと高を括り放縦生活を送るようなことがあってはいけない、と勧告されているように、「目を覚ましていなさい」は、生理的な睡眠というよりは、心理的な覚醒に関することとして考えられている。しかし、この前段のたとえの勧めは、備えて待つ僕に対して、ある意味で極度の緊張状態を常に保つことを求めるものになってしまっていることも否めず、不健全な精神状態を惹き起こす勧告となりかねない。それに対するいわば緩和策として、「十人のおとめのたとえ」がここに置かれていると見ることもできる。これが前段の勧告を緩和するものであることを明らかにするために、「目を覚ましていなさい」という勧告をだれも徹底して守れていないというたとえの筋書きを敢えて採用したと考えられるのである。

・このたとえの筋書きでカギとなっていると思われるのは、「ともし火」を保ち続けるために必要な「油」を用意しておくことである。「ともし火」を保ち続けることは、「賢いおとめ」も「愚かなおとめ」も同じように知っているが、「愚かなおとめ」は、保ち続けるための燃料である「油」を補充するための用意を怠っていたとされる。この「油」が何を指すのかは、まったく不明瞭で、教会史上の説教者たちも解釈に苦心してきた。M.ルターは、自身の神学的主張の中心であった信仰義認論に基づいて、この「油」は「信仰」を意味すると解釈した。しかし、より一般的には、この「油」は、「山上の説教」で示されるような「あなたがたの義」(5:20)に基づいた信仰実践を意味すると解釈されてきた。それは、確かに、後段に現れる「タラントンのたとえ」や「山羊と羊のたとえ」の示すこととも一致するように思われる。その場合、おとめたちの「眠り」は「死」を指し示し、「起き上がること」は「終末の復活」を指し示すことにもなる。しかしながら、そうとすれば、この「十人のおとめのたとえ」は、その信仰的实践としての「油」を、眠る前にあらかじめできるだけたくさん蓄えておきなさいという、信仰的加点主義(信仰的行為主義)を主張しているということになるのだろうか。

・このたとえの示す使信の不明瞭さは、むしろ、最後の句(13 節)によって逆説的に解消されているのかもしれない。すなわち、やはり「眠り込んでしまう」べきではなく、「目を覚ましていなさい」と言われるのである。

来週の誕生日 (10月17日~23日)

主日礼拝の讃美歌から

・II-4 番「この世にあかしをたて」(=21-379 番「この世にあかし立てて」)は、19 世紀を代表する讃美歌作家で英国教会主教の W.W.ハウ。作曲はヴォー

ン・ウィリアムズ。英語圏では聖徒の日にもっともよく歌われる讃美歌の一つ。

・21-385 番「花彩る春を」は、『讃美歌 21』編纂に当たって公募採用された日本人作詞作曲の讃美歌。作詞の上島美枝は、松山教会のオルガニストで、当初父親が作曲した曲との組み合わせで応募した。曲は、県町教会で受洗して後に日本キリスト教会に移った合唱指導者・作曲家の高浪晋一が、この歌詞に合わせて作曲。

・21-575 番「球根の中には」は、20 世紀中盤の米国で合同メソジスト教会が成立した時期に夫の牧する教会で音楽奉仕者として活動した音楽家ナタリー・スリースの創作讃美歌。合同メソジスト教会の讃美歌集に収録され、好んで歌われてきている。

II-4「この世にあかしをたて」

For All the Saints, who from their Labours Rest

1. For all the saints, who from their labors rest, / who thee by faith before the world confessed, / thy Name, O Jesus, be forever blessed. / Alleluia, Alleluia!
2. Thou wast their rock, their fortress and their might; / thou, Lord, their Captain in the well-fought fight; / thou, in the darkness drear, the one true Light. / Alleluia, Alleluia!
3. For the apostles' glorious company, / who bearing forth the cross o'er land and sea, / shook all the mighty world, we sing to Thee: / Alleluia, Alleluia!
4. O blest communion, fellowship divine! / We feebly struggle, they in glory shine / yet all are one in thee, for all are thine. / Alleluia, Alleluia!
5. And when the strife is fierce, the warfare long, / steals on the ear the distant triumph song, / and hearts are brave, again, and arms are strong. / Alleluia, Alleluia!
6. The golden evening brightens in the west; / soon, soon to faithful warriors cometh rest; / sweet is the calm of paradise the blest. / Alleluia, Alleluia!
7. But lo! there breaks a yet more glorious day; / the saints triumphant rise in bright array; / the King of glory passes on his way. / Alleluia, Alleluia!
8. From earth's wide bounds, from ocean's farthest coast, / through gates of pearl streams in the countless host, / singing to Father, Son, and Holy Ghost: / Alleluia, Alleluia!

21-575「球根の中には」

In the bulb there is a flower

1. In the bulb there is a flower; / in the seed, an apple tree; / in cocoons, a hidden promise: / butterflies will soon be free! / In the cold and snow of winter / there's a spring that waits to be, / unrevealed until its season, / something God alone can see.
2. There's a song in every silence, / seeking word and melody; / there's a dawn in every darkness / bringing hope to you and me. / From the past will come the future; / what it holds, a mystery, / unrevealed until its season, / something God alone can see.
3. In our end is our beginning; / in our time, infinity; / in our doubt there is believing; / in our life, eternity; / In our death, a resurrection; / at the last, a victory, / unrevealed until its season, / something God alone can see.